報　告

英語ライティング授業における長岡工業高等専門学校とネバダ州立大学リノ校間のE-Mail Exchange実践：中間報告

大湊　佳宏

一般教育科―英語（Liberal Arts-English, Nagaoka National College of Technology）

English Writing Classes and E-Mail Exchange between the Students of Nagaoka National College of Technology (NNCT) and University of Nevada, Reno (UNR): an Interim Report

Yoshihiro OMINATO

Abstract

This paper is an interim report on an E-Mail Exchange project which has been conducted for 8 weeks between the students of NNCT in Japan and UNR in the U.S. It introduces some effective ways of exchanging e-mails, exclusively between the two schools above. Participants of both schools answered questionnaires before and after this project, which suggested that the topics of students e-mail writing should be guided partially from his/her instructor with a certain "guideline" and, at the same time, chosen freely by students based on their own interests. And the questionnaires also showed that the students need more than one week to complete their e-mail to send their partners.

Key Words: e-mail exchange, topic, guideline, questionnaire, writing

1. INTRODUCTION

日本では平成10年度の学習指導要領から，実践的コミュニケーション能力の育成が改訂の大きなポイントとなり，日本中の中学校・高等学校の英語教師はそれに伴い，コミュニケーション能力の育成に切磋琢磨している。Communicative Language Teaching (CLT) の権威であるSavignon (2001) は，日本や台湾の英語教育を例に挙げ，過去四半世紀にわたるCLTの浸透ぶりを紹介している[1)]。

また彼女は，英語を教室外で使用する機会が極端に少ないEnglish as a Foreign Language (EFL) の解決策の一つとしてラジオ，テレビ，インターネットなどのtechnologyの活用を提案している。インターネット上でやり取りできるE-Mailの英語教育へ応用は多くの教育現場で実践され，その有効性はE-Mailの交換方法，メール上での使用言語などはそれぞれ異なるものの，成果を挙げたという報告を数多くみる[2)~12)]。さらに，インターネット上で手紙(文章ファイル)や写真または動画なども即座に交換できるE-mailのシステムは，英語の授業において，新しい人間関係(「人と人とを結ぶ[もの]」)を築く場面を提供しながらも英語能力を育成する上で大きな役割を担っていくことは間違いない[7) 13) 14)]。

学生の動機付けの側面において Warschauer (1996) は，computer-mediated communication (CMC) は，学生の動機付けを高めることができると断言している[15]。CMC とは，「ネットワーク接続されたコンピューター間で行われるコミュニケーション」[16]，またはコンピューターを使った人間間のコミュニケーションを指す包括的な用語である[17]。

このCMCの手法の一つであるE-Mailを英語の授業に活用するに当たり，過去の実践例を参考にし，UNR の外国語学部(日本語)の門脇由江講師，NNCT の一般教育科(英語)の若尾彰子助教授との話し合いを経て，NNCT と UNR の両校にとって適切である方法を試行錯誤して行った。今回の実践を通して，E-Mail Exchange を英語の授業に応用するに当たって新たにいくつかの問題にぶつかることになった。本報告論文はNNCT と UNR 間での E-Mail Exchange に至るまでの過程を紹介し，メール交換の期間，メール内容決め，パートナー決め，時間的制限等に関する問題点を明らかにし，事前・事後アンケートの結果に基づいてその対応策を提案する。

2. METHODS

2.1 Participants

(1) 日本側

本 E-Mail Exchange は，平成 15 年度 NNCT 電子制御工学科 2 年生の若尾彰子先生が担当する英語 II 履修生 42 名(男子 40 名，女子 2 名)を対象に実施した。週に 2 回(90 分と 50 分の)授業があり，月曜日にある 90 分授業の 45 分(最初の 2 週は 60 分)をライティングの時間として用意していただき実施した。2 年生の英語 II は文法とライティングの指導を並行して行っており，前期中に普通高校と高専の学校生活を比べる英作文や，前期期末試験で "Which is better, living in the dormitory or commuting from home?" を課題に英作文を書き上げている。

同時にNNCTの生徒がどれだけコンピューターを使用することに馴染みがあるのかを知るために，E-Mail Exchange 開始前にアンケート調査を行った。42 人中全員が家にコンピューターがあり，1 年以上のコンピューターの使用経験があると答えた。コンピューターを使用している年数は「2 年」と回答した生徒が一番多く 13 人，最長「8 年」と回答した生徒もいた。また「コンピューターを使ってワープロの機能を使用したことがありますか。」の問いに関しては，42 人全員が「たまにある」(21 人)または「頻繁にある」(21 人)と回答した。同じく E-Mail の使用経験の問いに関しても，28 人が「たまにある」12 人が「頻繁にある」と回答した(APPENDIX A 参照)。NNCT は工業系の学校のため，コンピューターの電源の入れ方を知らないような生徒は存在せず，導入の時間を節約することができた。また，生徒の母語に関しては 41 人が日本語を母語とし，1 名が中国語を母語としていた。

(2) アメリカ側

E-Mail の交換相手校の UNR では，卒業の必要条件として専攻とは別に副専攻の履修を必須としている学部がある。今回の参加者は，その副専攻で日本語を選択し，2003 年度秋学期に JPN305 (Japanese Conversation and Composition) を履修する学生 18 名(男子 11 名，女子 7 名)で実施した。JPN305 のクラスは，大学での 2 年間の日本語コースを終了した学生だけが履修を許される中級レベルの日本語の会話と作文のクラスである。

UNR の参加者は NNCT と多少年齢のひらきがあり，NNCT の生徒は全員が 16 歳から 17 歳であるのに対して，UNR の学生は 19 歳から 25 歳であった。JPN305 のクラスには留学生もおり，国籍や母語も様々で，台湾出身者が 1 名，中国出身者が 1 名，韓国出身者が 1 名で，母語については英語を母語としないものがいた 4 名いた(中国語 2 名，韓国語 2 名)。

NNCT と同様，UNR の学生にもコンピューターの使用経験等のアンケート調査を事前に行った。NNCT の生徒と同じく，参加者 18 人全員が家にコンピューターを所持し，タイピング能力やコンピューターの知識は，優れていると自己判断した学生が多く見られた。特徴的なのは，年齢も多少高いせいか，コンピューターの使用年数が最高 20 年間の学生が 2 人存在し，ワープロ機能や E-Mail の使用頻度が極端に高いことも分かった(APPENDIX A 参照)。これらのことから，UNR の学生は日常生活においても頻繁にコンピューターを利用していることが推測できる。また，日本語によるタイピング技能に関しては，E-Mail Exchange 開始前に JPN305 の授業で取り扱った。

2.2 期間

(1) 学期のずれ

継続的に同じ E-Mail Exchange のパートナーとメールの交換をするに当たり，日本の学校とアメリカの学校での学期のずれが弊害になることが，UNR の門脇先生との間でも議論になった。日本とカナダ間で E-Mail Exchange を実践した，伊東 & Prikryl (1998) や日本とオーストラリア間で E-Mail Exchange を実践した川村 (1997) や Stockwell & Levy (2001) も同じ問題を指摘している[5)8)11)]。特に川村の実践では後期に 6 週間しか重ならなかったとのことだった。今村 (1996) も，海外の学生とメール交換をするときの問題点の 1 つとして，2 学期制と 3 学期制の学期の不整合を指摘している[18)]。

NNCT と UNR のそれぞれの後期と秋学期の開始される時期は，10 月上旬と 8 月下旬でそれぞれ異なり，終了時期は NNCT は 2 月上旬，UNR は 12 月中旬であった。したがって，実際にメール交換ができるであろう期間は，10 月上旬から 12 月中旬である。しかしながら，両校ともに定期テストが 12 月中旬にあるため，12 月の実践は避けることとなり，結局 10 月中旬から 11 月下旬までのその時期に E-Mail Exchange を行うことに設定した。結果，8 週の E-Mail の交換期間を確保することができた。海外の学校と E-Mail 交換を行うときは，必ずといっていいほどこの問題は生じる。

この問題を解消するための実践ではないのだが，笠井 (2000) は，彼女が担当する 2 つの大学の英語のクラス間において学生同士で E-Mail の交換をさせている[9)]。日本国内の学生同士を E-Mail の交換相手として設定したことにより，多国間による学期のずれの問題は解消されている。

また，最近の研究の結果 Stockwell & Levy (2001) と Stockwell & Harrington (2003) は，学生にまったく授業中にメール文の作成をさせずに E-Mail Exchange を宿題とし，メールを書くガイドラインとして「自己紹介」，「余暇の過ごし方」，「レストランでの食事」等のトピックを与え自由に選択させ，「少なくとも 1 週間に 4 回から 5 回の Exchange を行うように」と指示を出した[5)19)]。この方法だと「実施期間が短くなると，メールの交換回数も少なくなる」という心配事がなくなることが分かる。しかし，自分のペースでメールを交換すると，メールを出すのを怠ってしまう生徒が出てくることも事実である。

今回の実践では，**2.6** 時間的制限の箇所でも詳しく述べるが，授業中にメールを書くことを基本とし，受信メールを読んだ後，書き終わらなかったメールに関しては宿題にすることにし，授業でも宿題でも扱うこととした。

(2) 祝日

まず UNR から自己紹介文を送信し，NNCT が次週の月曜日にそのメールを受け取る。その返事を授業中に書き返信し，UNR の学生はその週の金曜日の授業でそのメールを読むこととなる。このように，週に 1 度のサイクルでメール交換を計画した。しかし，日本の祝日が月曜日に集中していることもあり，そのサイクルは壊され，スケジュール調整に頭を悩ませられた。

その半面，このことは参加者を「祝日」というテーマについて議論させる，絶好の機会に転じたのだった。日本ではこの間，「体育の日」，「文化の日」，「勤労感謝の日(振り替え休日)」をはさみ，アメリカでも "Nevada Day" という Halloween に連休を作るための休日を挟むこととなった。このことで，メール交換をする回数は 3 回程減ってしまったわけだが，将来の E-Mail Exchange 実施時には，「祝日」を意図的に挟むことにより，それぞれの国の祝日という文化的要素を自然に提供し，その祝日について話し合うというテーマを，いくらか暗示的に指示できることが分かった。

2.3 使用言語

E-Mail Exchange を行う授業の目的や，生徒の目標言語（Target Language: 以下 TL とする）の熟達度などによってメール上で使用される言語は，生徒や学生の TL なのか Native Language(NL)なのかが決まる。

メール交換の継続数・何回メールを交換できたか(sustainability)と第 2 言語(Second Language:以下 L2 とする)の習熟度の関係を研究した Stockwell & Levy (2001) や，E-Mail 交換から得られた偶発的に学習した知識が，L2 の統語的・語彙的発達に影響を与えるか調べた Stockwell & Harrington (2003)は，オーストラリア人学習者にとっては TL の，日本人学習者にとっては NL の日本語のみをメール上で使用した[5)19)]。また，川村 (1997) の実践では，日本人の英語学習者に「早くコンピューターにも慣れて欲しい」

「1年生なので英語に自信がない」などの理由をあげ，メール上の主な使用言語が日本語となった[11]。これら3つの実践例では，どちらかのNLだけをメール上の使用言語として使用している。

反対に，O'Dowd (2003) が行った ethnographic study や，伊東 & Prikryl (1998) の実践では，それぞれのTLとNLが両方使用された[8)20]。O'Dowdの実践では，「言葉に含まれる暗示的な意味(connotation)」の起源や文化的重要性の説明をそれぞれのNLで，それぞれのNLのイディオムの説明をTLでやらせるなど，両方の言語を使用するための自然な工夫が見られた。

Gonglewski, *et al.* (2001) は，E-Mail Exchangeの際，1つの言語だけを使用すると，Native Speaker (NS) は motivation をいつも維持できるとは限らず，両言語を同じ割合で使用する "tandem exchange" が相互にとって有益であると提案している[21]。NNCTの生徒は英語の学習者で，UNRの学生は日本語の学習者であることを考慮すると，今回の E-Mail Exchange は英語と日本語の両言語で行うことが，両者共に利益となるので両言語を使用することに決定した。また，日本語と英語とでは書く内容を別々のものに設定した。詳しくは，**2.4** 内容に記載した。

2.4 内容

(1) Task

伊東 & Prikryl (1998) の実践と類似しているが，NNCT と UNR の両校の生徒に 12 月の E-Mail Exchange 終了段階において，自分のパートナーの紹介文を書き上げることを目標に E-Mail Exchange を行うかたちで今回の実践を進めた[8]。また，この紹介文を基に成績評価も行った。

(2) メールの中身：選択肢

生徒にどのような内容をメールに書いてもらって，海外の学校と E-Mail Exchange を行うかは，その実践された学校によって異なる。どのような内容をトピックとして設定し，生徒に書かせるかという問題の前に，そのトピックを指定するか否かという問題が存在する。

伊東 & Prikryl (1998), 笠井 (2000), Hays (1997) などの実践では，1回目，2回目，3回目，とメールを送るごとにそのトピックは教師が指定していた。川村 (1997) の実践ではトピックは，学生との話し合いによって決められた[8) 9) 11) 22]。Keogh (2001) の様に，メール交換相手の国の「ステレオタイプ」についてのみ意見交換をするという，実践例もある[4]。

またトピックに関して少し柔軟性があるのは，Stockwell & Levy (2001) と Stockwell & Harrington (2003) の実践で，教師が指定したトピックを選択肢(ガイドライン)として提示する方法である[5) 19]。彼らの実践の場合，学生は担当教官が例として与えたトピックを選んで使用してもいいし，自分なりに考え出したトピックでメールを書くという選択肢も与えられている。

Stockwell & Levy (2001) の実践では，教師が決めたトピックに固執してメールを交換させるよりも，それ以外のトピックについてメールで話し合ったほうが盛り上がりをみせ，メール交換の頻度が上がったと報告している[5]。

今回の実践では，著者が特定の文法項目を，トピックや決まった質問文で E-Mail 上の文章に引き出すという他の実験を同時進行で行ったため，特定のトピックを予め生徒に与えることとなった。それに加え，Stockwell & Levy の実践結果を考慮し，付け加える形で，教師が決めた以外のトピックについても書いても良いとの指示も出した。こうすることにより，最終 Task に書く色々な情報も自由に引き出すことができる。指定したトピックに対する生徒の反応は，**4** DISCUSSION で詳しく言及する。

(3) メールの中身：TOPIC

最初に「自己紹介」を，それぞれの TL で送信することとなった。先ず UNR の学生は NNCT の生徒に自己紹介のメールを TL の日本語で送る。次週の金曜日までには，UNR の学生は NNCT の生徒の書いた英語の自己紹介を受け取ることになる。この英

表-1　送信メールの大まかな内容と使用言語

UNR の学生 (毎週金曜日に授業)		NNCT の生徒 毎週(月曜日に授業)
・(日本語で)前のメールの返事を書く。 ・Introduce a new topic (in English).	⇔	・Reply to the new topic (in English). ・(日本語で)新しいトピックについて意見を書く。

語の自己紹介の送信と同時に，NNCT の生徒は日本語で新しいトピックを「自己紹介」と同じメールに書き込み送信する。次週月曜日までには，UNR の学生が，その日本語の新しいトピックに関する返事と，さらに新しい英語でのトピックをNNCTの生徒に送信する。また，両校ともに，新しいトピックをパートナーに紹介し話し合う際に，ただ意見を述べるだけでなく相手の意見を引き出す質問文を多く入れるように指示をした。表-1 のようにこれを 4 回繰り返す。表-1 の括弧内にもあるように，1 つのメールには日本語と英語（TL と NL）の両方が使用される。これは，単に TL を NL に翻訳したものではなく，内容そのものも違う。

2.5 パートナーの決定

(1) 個人か複数グループか：過去の実践例

E-Mail を交換する際，個人単位，グループ単位，クラス単位，またはメーリング・リストなどでメールをクラス全員やグループ全員に回す方法など色々なものがある。E-Mail Exchange のパートナー決めについては伊東＆ Prikryl (1998) は，各校にグループ(1996 年度は，日本側 1 名に対しカナダ側 2 名；1997 年度は日本側 2 名に対してカナダ側 2 名)を形成し，そのグループ間で自由にメールをまわしてメールを交換する方法をとっている[8]。また，川村 (1997) もグループ間での実践を行っている[11]。グループで行うことの利点は，欠席者に対する対応ができることや，自分の興味と合う人と意見交換ができることが挙げられる。また，「1 人につき複数のペアを構成」することで，メール上の話題に生徒がつまらずに進行できることを竹内（1996）は指摘している[22]。これと同じやり方で，Hays (1997) も E-Mail Exchange を実践し，1 対 1(個人と個人)でメールのやり取りをすると，メールの返事が返ってこなかった場合危険であることを示唆している[23]。Hays の実践は，日本側の 1 人の生徒に，海外の学生(南アフリカの高校，イタリアの高校，ドイツの大学が相手校の)3 人を割り振り，E-Mail Exchange をさせた。同様に，

海外の生徒にも日本側の学生 3 人を割り振った。計 6 人のメンバーのグループ内で相手側のグループの 3 人全員に(同じ内容のメールでもよい)メールを書かせ，これを 3 回繰り返し E-Mail Exchange を行った。

(2) 個人か複数かグループか：今回の実践

確かに，Hays の実践では，メールが帰ってこない可能性は技術的な問題や突然の災害や事故がない限りゼロである。しかし，メール自体は継続して交換できても，内容的に継続しないメールが出てくるのではないだろうか。メール上でかわされる質問の「やり取り」などの “negotiation of meaning” の側面が薄くなってはしまわないだろうか。人と人とを結ぶ道具としての機能が，グループ同士ではどうしても薄れてしまう。この問題は，1 人ひとりに別の文章を書くことでこの問題は解決されるであろうが，今度は 3 人へ一定量の文章を TL で書かせるという、過度の時間と労力のかかる課題を生徒に課すことになってしまう。TL という外国語だけを学ぶために学校に通っていない，例えば英語を専攻としない (Non-English Major の) 学生にとっては，これは時間の制約という大きな問題である。

今回の NNCT と UNR の実践では，参加人数が圧倒的に NNCT の方が多い (NNCT:42 人, UNR:18 人)。両校ともに TL を専攻として学んではおらず (UNR では日本語は副専攻)，特に NNCT においては，工業系の生徒であるために，他の教科科目に費やすであろう時間を考慮して，複数のパートナーにメールを書くことは避ける必要があった。また，UNR の門脇先生との話し合いからは，先ほどの Hays の実践をクラス単位にして，幾つかの受信メールを提示して，メールに使われた語彙や表現や文法などを紹介する案も出た。しかし人と人との結びつきを大事にしたメールのやり取りがしたいという，NNCT 側の希望に配慮して，極力個人単位でメールの交換をしていく運びとなった。しかし，個人単位といっても NNCT の生徒の数が多いので，NNCT の生徒 1 人に対して UNR の学生を 2 人ないしは 3 人で E-Mail Exchange をすることとなった。Hays の実践と違う点は，UNR の学生が NNCT のパートナーにそれぞれの返信をすることである。結果，UNR の学生にとってはかなりの負担をかけることとなった。

2.6 時間的制限

E-Mail Exchange が開始される前の夏休み(8 月 28 日)に，NNCT の若尾先生とのミーティングの機会をもたせていただいた。授業 1 時間で受信文(英語と日本語)を読み，返信の内容を考えそれを(英語と日本

語で)書いて送信することは不可能であるとの指摘があった。しかし，週に1通の交換サイクルを崩したくはないので，その方略も相談させていただいた。結果，多くを宿題とする運びとなった。例えば，毎週金曜に授業のある UNR からは，時差も考えると遅くても(日本時間で)日曜日の午後にはメールが届くように送信の締め切り（due date）を設定してもらい，日曜に各生徒の家または寮でメールを読んでくることを宿題とした。また，コンピューターにアクセスできない環境にあった生徒に関しては，LL 教室に月曜日の昼休みに各自がメールチェックを行い，午後の授業に間に合わせるように指示を出した。

E-Mail Exchange 初日は，授業中に一つ問題が起こった。1 人の生徒が，送信しようとした文章を授業終了時に誤って消してしまったのである。何とか送信させようとあっせっていたせいだと思われる。また，日本語で書く文章は NL で書くので，そこまで時間を費やす必要はないと思っていたが，日本語では自分の意思表示を思ったとおりにできるので，逆に文章にこってしまい時間がかかってしまった。

このようなことを踏まえ，次回からは授業中に送信する必要がないことを生徒に伝えた。その代わりに，Hays (1997) の実践のように送信の due date を水曜日に設定し，cc: (カーボンコピー) を使用し教師にも送信するように指示して送信の有無を確かめた。日本語(NL)文の作成についても特定のトピックに関する生徒の意見は前もって用意して，フロッピーディスクに保存し持参するよう指示した。また，授業中には「これを英語で何って言うの？」という質問をする時間にあて，教師はその質問に答えるサポート役に徹し、竹内 (1996) の述べる参加者が話題に困ったときにトピックを提供するなどの "facilitator" 役に徹した[22]。

2.7 欠席者に対する対応

基本的には，両校とも生徒が欠席しても，メール自体は各生徒のメール・アカウントに送信されているので，翌日などに返信することができる。しかし E-Mail Exchange 実践初日に2人の生徒が欠席してしまった。欠席者への対応は UNR の門脇先生との打ち合わせで当初から決定していたのだが，教師がそれを代筆して送信することになった。内容は，パートナー名を表しながら，ことの経緯を説明し決められたトピックについて教師の事例について書いて送信するものだった。UNR の学生側からは特に批判的な声は上がらなかった。

2.8 諸問題

「メールが届いていません。」生徒のこの声に一番頭を悩まされた。メール交換初日には，NNCT においては3名の生徒がメールを受信できなかった。原因を突き止めたら，UNR の学生のアドレス入力時の miss spelling によるものだった。UNR 側には，NNCT の生徒の E-Mail Address リストをあらかじめ送付しておいたのだが，そのリストの記入の仕方が混乱を生んだようだった。どのように違えたのかを，将来の実践のために挙げておく。

リストには各生徒の名前とその読み仮名と E-Mail Address が表の中に記載されていた。表の中に E-Mail Address が書かれているために，アドレスの下にアンダーラインが引かれたような表記になり，図-1のように，アルファベットの "q" が "g" に見えたのである。細かいことではあるが，メールが届かないと授業中にやることがなくなってしまうので，次回の実践からは注意深く進行していきたい。

そのときの対処法であるが，今回は両校の生徒に cc:で教師宛にもコピーが送信するように指示をしていたので，それをコピーして渡し事なきをえた。

また，下書きを家で書いてきてフロッピーディスクに入れて持ってきたのに，学校のコンピューターでは開けない，などの技術的な問題も起きたが。他のコンピューターでファイルを開きメールの送信ができたので，そのまま続けさせた。

他にも，cc:の欄に教師の E-Mail Address を書き忘れて送信した生徒も見受けられた。E-Mail Exchange を授業で実践するのが初めてだったので，生徒も不慣れだったということもあるが，これは教師である私の不明確な指示に原因があった。ハンド・アウトを作成し配布したのだが，次回はもっと明確に指示できるよう工夫していきたい。

図-1

ec5555q@st.nagaoka-ct.ac.jp

3. DISCUSSION

3.1 事後アンケート結果との比較・考察

E-Mail Exchange 開始前と終了後に，事前事後アンケートを行った。スペースの関係で全てを記載はできないが，今回課題として挙げられた「時間制限」に関するもの，「トピック決め」に関するもの，そして全体を通しての感想を取り上げ比較考察する。

(1) 時間の制約

UNR においては，1 人の学生が 2 から 3 人の生徒にメールを送信することもあって，短い時間で多くの TL でのライティングをさせてしまい負担になったであろうと予測していたが。アンケート上で，今回の "Email Exchange Project" の悪い点として，そのことに触れたのは１７人中(参加者１８人:１名未提出) 6 人であった。幾つかの意見をそのまま紹介すると "...The only thing for me personally was not having enough time to write much..." "Writing lengthy emails to 3 people per week was a little bit taxing." "One bad thing was the small amount of time for each e-mail. Everything else was good." のような感想があった。

また，NNCT 側では週に 1 人しかメールを送信しなかったので，UNR の学生のような声が聞かれなかったとかといえば，そうではなかった。NNCT の学生の 42 人中 15 人は，「授業時間が短かったのでもっと長くして欲しい。」「時間が足りなく，他の授業の課題といつも重なってしまったので，授業中などに時間がもっとほしかった。」「もう少し返信までの時間が欲しかった。2 週間に 1 回くらいのペースが良かった。」などの意見をよせ，E-mail Exchange に取り組む時間の短さを主張していた。UNR と NNCT それぞれ 6 人と 15 人という人数が多い・少ないという問題ではなく，そのように感じた生徒がいたというところに改善の余地を感ずる。

パートナー決めの際，個人単位でメール交換できるように調整することでライティングの絶対量が減り負担を軽減し，よりメールの中身に集中することができるよう次回は工夫していきたい。NNCT の生徒で「自分のペースでやりたい。授業だと締め切りがあって、あせって変な英文を書いてしまう。」との声もあった。相手の送信してきたメールを TL で読む時間と TL で返信メールを書く時間の他に，書く内容を吟味する時間が必要なことを改めて実感させられた。よって、メールを交換するサイクルを長めに設定していくことも次回は考慮したい。やはり，長期的な目で見て，メール交換を年間の指導計画の中に含め，じっくりと取り組んでいくのが時間の制約に関する最善の策であろう。

(2) トピックの決定

はたして，Stockwell & Levy (2001) の実践が提唱するように，E-Mail Exchange の参加者はメールのトピックに関して自由度を求めるのであろうか [5]。求めるのであれば，事後アンケートに何らかの訴えがあると予測できる。また，あるトピックについて書いて欲しいと強制的に教師が頼んだことに対し，参加者がどのように感じているかを 5 件法 (five-point Likert scale) を使って事前・事後アンケートで回答してもらった。また，**2.4** 内容のところでも述べたが，指定したトピックの中身自体については，他の研究で調査中のため，また，スペースの関係でここでは触れないこととする。

先ずは，メール上に書くトピックが指定されたことに対する NNCT と UNR の生徒の反応であるが、トピックが決められていたことで，文が書きやすかったかどうかを，事後アンケートで「はい(YES)」「いいえ(NO)の二者択一と，その理由を聞く形で聞いてみた(APPENDIX B 参照)。すると，NNCT 側では 42 人中「はい」が 16 人「いいえ」が 25 人と，Stockwell & Levy が提唱するように，自由度への欲求が現れた。UNR 側ではこの数が反転し"YES"が 11 人"NO"が 5 人で，トピックが決められていた方が書きやすかったという反応が多くあった。NNCT で「いいえ」と答えた生徒からは，「決められていたので自分の聞きたいことが聞けなかった。」や「特定の事柄だけだと話題が発展しづらかった。」などの声が聞かれた。後者の「内容の発展」については，トピックだけでなく前項でも述べたように「書く内容を吟味する時間」が思っていたよりも多く必要なことが分かっている。「いいえ」と答えた生徒の中には「[トピックが]無いと話題性に乏しくなる。」という意見もある。また、「はい」と答えた生徒の理由のなかにも「どんなことを書こうか悩む必要がなかったから。」や "Sometimes it's hard to think of a topic to write about, so having the topic chosen already is easier." のような理由が見受けられた。また，UNR で無効になった"YES"と"NO"の両方にしるしをつけた生徒は "It is easier,

but no genuine communication is achieved. You might as well be writing to no one." と，コミュニケーションを行ううえでの核となる "genuine question" (本物の質問) の欠如への指摘もあった。やはり，自由度への欲求と時間の制限の問題を満たすには，Stockwell & Levy (2001) と Stockwell & Harrington (2003) の実践のような，トピックを「ガイドライン」として提示することで，強制的にトピックを与えることを避け，1 つの選択肢として与える方法が参加者の E-Mail ライティングへの不満を減らす上でもベストであると考えられる[5] [18]。

また，事前・事後アンケート間で差が現れたのも，このトピックに関するものであった。5 件法で得たトピック(内容の決定)に関するアンケートのデータを使い，各学校における E-mail Exchange の事前・事後の平均値(APPENDIX C 参照)の差を有意水準 5% で両側検定の t 検定により検討した。その結果，NNCT では，$t(41) = -0.39$，$p = 0.69$ であり，これらの平均値の差は有意ではなかった。しかし，UNR においては，$t(16) = 3.04$，$p < 0.01$ でありこれらの平均値の差は有意であった。NNCT では，かすかに平均値が上がっているが，大きな変化ではなかった。注目すべきは UNR である。UNR においては，初めはトピックが決められていることに対する固定観念が，トピックがすでに決められていた E-Mail Exchange を経験することによって，その要素の中の何かに肯定的な感覚を得て，意見が大きく変わったことが言える。APPENDIX B においても UNR は，NNCT とは反対に，トピックが決めてあると書きやすかったという学生の数が多くなった理由は，はたして何なのであろうか。この両校間の差は興味深いものである。今回のアンケート調査は記名をしてもらってあり，交換されたメールも保存してあるので，今後 APPENDIX B の問いに「はい」や「いいえ」と答えた学生の E-Mail の内容やメールの分量(T-unit や error free T-unit)との比較研究も進めていき，明らかにしていきたい。

また，NNCT においては 5 件法の検証の結果の絶対数が，事前・事後アンケート調査とも，3 以上 (neutral 以上)であったことから，また，APPDENDIX B の結果も踏まえていうと，どちらかと言えば内容は自分で決定したいという傾向にあるのではないだろうか。

4. CONCLUSION

今回の実践で特に大きな課題としてあがったのは，「時間の制約」と「内容の決定」であった。一通のメールを作成するに当たって，より長い時間を用意すること。また NNCT においては，内容決定を強制的に押し付けず，「ガイドライン」として提示することが次回の実践では求められることが分かった。それぞれ，次回の実践への課題として提案してきたが，これらは，参加者の実態や参加者の置かれている環境などが複雑に絡み合い，そのつど最適な条件は変化する。一概にそれを一般化することは不可能であり，するにしても多種の状況を把握し慎重に行うべきである。

また同時に，内容を決定されることを UNR の学生は好み，NNCT の生徒は好まない傾向にあったのはなぜなのかが，疑問に終わってしまった。そして，お互いの TL を使用言語として両方採用したのは正解であったのだろうか。これに対して意見を述べる参加者はいなかった。これらの二つのことについては，次回の研究や実践で深めて行きたい。

著者は，TL を使用してお互いを理解し合おうとする前向きの心や態度を，E-Mail Exchange というコミュニケーションの手段を利用することで，養うことができるものであると強く信じている。その Email Exchange を次回の実践ではよりスムーズかつ効果的に進めるために，またより生徒に受け入れられる方法で行うためにも，今回の実践を参考にし，次回の実践へと結び付けて行きたい。

ACKNOWLEDGEMENT：多忙な中，貴重な助言をいただき，未熟な著者の実践を辛抱強く温かく見守ってくださった若尾彰子先生に，先ずこの実践結果をご報告するとともに，感謝の意を表したい。そして E-Mail Exchange 実践の以前から，またその最中にも何度も連絡を取り合い，著者のわがままで多くのやり方の変更を余儀なくされたのにも関わらず，最後まで快くご協力下さった UNR の門脇由江先生に深く感謝申し上げます。NNCT42 名，UNR18 名の学生の参加者の皆さんも、最後まで本当にご協力ありがとうございました。

APENDIX A

＜生徒の実態調査(アンケート)結果＞

1. あなたはタイピングが上手ですか。

	NNCT	UNR
すごく下手	2人	0人
下手	15人	1人
普通	17人	5人
上手	5人	5人
すごく上手	3人	7人

2. コンピューターについての知識をもっていますか。

	NNCT	UNR
全然ない	3人	0人
ない	10人	1人
普通	19人	5人
ある	7人	7人
すごくある	3人	5人

3. 家にコンピューターはありますか。

	NNCT	UNR
ある	42人	18人
ない	0人	0人

4. 何年間コンピューターを使用していますか。

	NNCT	UNR		NNCT	UNR
0年	0人	0人	11年	0人	1人
1年	4人	0人	12年	0人	2人
2年	13人	0人	13年	0人	0人
3年	8人	1人	14年	0人	0人
4年	6人	1人	15年	0人	0人
5年	6人	0人	16年	0人	0人
6年	1人	2人	17年	0人	0人
7年	3人	3人	18年	0人	0人
8年	1人	1人	19年	0人	0人
9年	0人	0人	20年	0人	2人
10年	0人	3人	21年	0人	0人

注：UNR 側に無効票2(1つは"Since I could breath"と記入，1つは白紙)

5. コンピューターを使って以下のことをやったことがありますか。

＜ワープロ＞	NNCT	UNR
一度もない	0人	1人
たまにある	21人	0人
頻繁にある	21人	17人
＜E-Mail＞	NNCT	UNR
一度もない	2人	0人
たまにある	28人	0人
頻繁にある	12人	18人

APPENDIX B

トピックを決められていると書きやすかったか。

NNCT（無効1）		UNR（無効1）	
はい	いいえ	YES	NO
16人	25人	11人	5人

APPENDIX C

事前アンケート（5件法）

(日)：E-Mail を外国人と交換し合うなら，メールに書く内容は自分で決定したい。

(英)：When I exchange e-mail with my Japanese partner, I would like to decide what to write.

1. strongly disagree　2. disagree　3. neutral　4. agree　5. strongly agree

	平均		平均
NNCT (42人)	3.524	UNR(17人) 1人未提出	3.471

事後アンケート（5件法）

	平均		平均
NNCT (42人)	3.583	UNR(17人) 1人未提出	2.412

REFERENCES

1) Savignon, S. J. (2001). Communicative Language Teaching for the Twenty-First Century. In M. Celce-Murcia (Ed.), *Teaching English as a Second or Foreign Language* (pp. 13-42). Boston, MA: Heinle & Heinle.

2) Fedderholdt, K. (2001). An E-mail Exchange Project Between Non-Native Speakers of English. *ELT Journal*, 55 (3), 273-280.

3) Greenfield, R. (2003). Collaborative E-Mail Exchange for Teaching Secondary ESL: A Case Study in Hong Kong. *Language Learning & Technology*, 7 (11), 45-70.

4) Keogh, R. (2001). Examining Australian and Japanese Stereotypes Via E-mail Exchange. *The Internet TESL*, Vol.VII, No.10, October 2001. Retrieved April 2nd, 2003 from the World Wide Web: http://itesl.org/Lesspns/Keogh-Stereotypes/

5) Stockwell, G. & Levy, M. (2001). Sustainability of E-mail Interactions Between Native Speakers and Non-Native Speakers. *Computer Assisted Language Learning*, 14 (5): 419-442.

6) 秋山範子(1996)「電子メールでつなぐ日英の教室」『インターネットと英語教育』45 (10): 163-165.

7) 朝尾幸次郎・杉本卓(2002)『インターネットを活かした英語教育』大修館書店

8) 伊東冶己・Prikryl, Y. A. (1998).「E-mail を利用した異文化間コミュニケーション授業の試み：日本の英語教育とカナダの日本語教育の連帯を軸に」『奈良教育大学紀要』47 (1): 105-122.

9) 笠井逸子(2000)「英語教育に e-mail を利用する：key pal プロジェクトの例」『学苑』720: 45-56.

10) 片山　博(2001)「中学校での e-mail の実践」『英語教育』 50 (10): 62-64.

11) 川村欣司(1997)「E-mail を利用した「異文化間交流」」『大阪国際大学紀要 国際研究論業』9 (2): 339-348.

12) 吉野康子(2000) 「E-Mail を利用した異文化理解教育：Curtis 高校との交流を通しての英語教育の実践」『長野工業高等専門学校紀要』34: 117-123.

13) 三浦孝・弘山貞夫・中嶋洋一(編著)(2002)『だから英語は教育なんだ：心を育てる英語授業のアプローチ』研究社

14) Warschauer, M. (1995). *E-Mail for English Teaching.* Alexandria, VA: TESOL Publications. (渡辺雅仁(訳) (1997)『英語教育のための E-mail』洋版出版)

15) Warschauer, M. (1996). Motivational Aspects of Using Computers for Writing Communication. In M. Warschauer (Ed.), *Telecollaboration in Foreign Language Learning*: 29-46. Honolulu, HI: Second Language Teaching & Curriculum Center. Retrieved April 2nd, 2003 from the World Wide Web: http://nflrc .hawaii.edu/Networks/NW01/NW01.html

16) Warschauer, M., Shetzer, H., & Meloni, C. (2000) *Internet for English Teaching*. Alexandria, VA: TESOL Publications. (古谷千里，他(訳) (2001) 『インターネット時代の英語教育』Pearson Education Japan.)

17) Simpson, J. (2002) Computer-mediated communication. *ELT Journal*, Vol.56/4, 414-415.

18) 今村洋美(1996)「インターネットを使った英語教育の進め方①情報の読み取りと発信　電子メールの利用」『インターネットと英語教育』45(10): 76-81.

19) Stockwell, G. & Harrington, M. (2003) The Incidental Development of L2 Proficiency in NS-NNS Email Interactions. *CALICO Journal.* 20(2): 337-359.

20) O'Dowd, R. (2003). Understanding the "Other Side": Intercultural Learning in a Spanish-English E-Mail Exchange. *Language Learning & Technology.* 7 (2): 118-144. Retrieved November 23rd, 2003 from the World Wide Web:http://llt.msu.edu/vol7num2/ odowd/default.html

21) Gonglewski, M., Meloni, C. & Brant, J. (2001) Using E-mail in Foreign Language Teaching: Rational and Suggestions. *The Internet TESL Journal,* 7 (3). Retrieved April 26th, 2003 from the World Wide Web:http://iteslj. org/Techniques/Meloni-Email.html

22) 竹内　理 (1996) 「外国語教育・研究における-Internet の利用」LLA 関西支部研究収録 6 号: 13-43. Retrieved April 14th, 2003 from the World Wide Web:http://www2. ipckykansai-u.ac.kp/~takeuchi/papers/LLARonbun.html.

23) Hays, L. E. (1997) "E-mail Communication: A case study of facilitative and administrative considerations for implementing E-mail letter exchanges in a university EFL class" 『論苑』8: 69-86.

(2004. 8.19 受付)